



『すべての子どもの権利を実現する インクルーシブ保育へ』

芦澤清音 浜谷直人 五十嵐元子 林恵
三山岳 飯野雄大 山本理絵 著
ひとなる書房 刊

定価 2,200円 (本体2,000円+税)

インクルーシブ保育とは、国籍、人種、性や経済状況の違い、障がいの有無における差別がなく、多様な人間が共生できる社会を実現させるための保育だ。本書はそのインクルーシブ保育の事例を分析し、成功要件を明示している。

福井県越前市の上太田保育園は、2015年に外国籍の子どもが園児の半数を占めるまでになったことを契機にインクルーシブ保育を始める。年齢に即したアクティビティや食事のかわりに子どもの気持ちに沿ったそれらを提供し、子どもの言語と文化を尊重した結果、園児らは国の違いを超えて話し合ったり遊びを提案し合ったりするようになったという。また、医療的ケア児の装着する医療機器に拒否反応を示していた園児らが、それを当たり前のこととして受け入れ、ケア児とともに活動をするようになり、それがケア児の感情表現を豊かにさせたという相乗作用に

よる子どもの精神的成長を示す事例もある。インクルーシブ保育とは、慣行の積み重ねだった従来の保育と違い、子どもにそこへの適応を迫るものではなく、子どもとともに作り上げていくものだと理解できる。

日本では子どもの数は減っているが、発達障害の子どもは増えていて、2020年には06年比13倍の9万人と試算された。在日外国人の子どもも増えている。一人親世帯も増え、育児環境は多様になった。今やインクルーシブ保育は理想ではなく必須だ。社会における排斥や差別の問題は同化や隔離では解決できないということを得得した子どもたちが、多文化共生社会実現の鍵となる。

農業はさまざまな仕事の集合体なので、多様な人たちを作業者として受け入れることができる包摂的な世界だ。地域農業が体験教室などを通じてインクルーシブ保育を後押しすることはできないものだろうか。本書を読んでいるうちに、そんなことをふと思った。

(日本農業新聞 さいとう はな 齋藤 花)